

本日は、お忙しい中を地理空間学会の設立総会にお集まりいただきありがとうございます。

私が地理空間学会の初代会長に推薦されたのは、東京教育大学・筑波大学出身の国立大学の現役の教員としては人文地理学の分野において最年長になったことによるものと思われます。先輩の斎藤功先生はすでに筑波大学を離れ、長野大学に移ってしまいましたし、大学・大学院時代に同期であった石井英也先生はついこの間、つくばで退職祝賀会を行いました。埼玉大学の教員の定年は65歳ですので、定年まであと2年ある私のところに地理空間学会の会長職が回ってきたのかと思っています。

本日、地理空間学会の設立総会がここ大塚の茗溪会館で開催されたことは、本学会が茗溪の伝統を受け継いで発展していこうという意気込みを表したものと思います。私が大塚にあった東京教育大学で地理学を学び始めたのは、実に45年前であります。入学したときの人文地理学の教授・助教授は青野、尾留川、幸田、浅香の先生方であり、これらの先生方から人文地理学を学びました。それからの人文地理学の基本的な考え方は変わらないものの、分析手法やパラダイムは大きく変化してきました。

地理空間に生じる現象を把握する方法の技術的な変化は身近なところでは、GISの普及とカーナビゲーションの進歩に示されていますし、さらにインターネットの世界ではグーグルアースによって空間情報を地図と衛星写真によって整理することができるようになりました。しかし、空間情報の重ね合わせの考え方は、地理学において地図を重ねて現象の関係を探るという、古くから用いられてきた方法に基づくものです。技術の進歩によって、地理学の基本的考え方が幅広く応用されるようになったものと考えられます。このような空間情報の処理の発達を反映して、地理学への関心が増加し、アメリカ地理学会（AAG）の会員数は2000年の約6,000人が、2007年には10,000人を超えるようになりました。

先月、私の出身校の岩手県の一関一高の卒業45周年の同期会が東京で開催されました。そこで、私の専門分野は地理学であると話したところ、今問題となっている環境問題についてもっともっと発言して下さいと意見を言われました。一般の人びとでも、地理学は環境問題を扱っているという認識があり、我々はそれに答えていく必要があると思います。

一方では、最近の新聞紙上でも話題になりましたように、学生の地理的知識の乏しさは「どげんかせんといかん」ということになります。宮崎県の位置を地図上で答えることができる高校生の割合は43%だけ、イラクの正答率も高校生では5割に達せず、地理教育の充実を図っていかなければなりません。地名とその場所の認識は空間的に思考する際の基本です。本日、出席の皆様の中には私のアメリカ地誌の授業をとったことがある人がいると思いますが、私はアメリカ地誌を教えるときに、アメリカの50州を必ず覚えさせるようにしています。50州の名前と位置を覚えていなければ、地誌の情報を空間的に整理することができないからです。場所を特定してその地誌的記述をする場合にも、場所の位置を知らなければ、そこと周辺との関係の理解が不十分になってしまいます。空間的理解にとって、地名を覚えるという基本的なことが必要です。さらに、多様なグローバリゼーションを理解するためにも、地理的知識を欠くことができません。

現在、編集委員長の山本正三先生のもとで朝倉書店の「日本の地誌」シリーズが刊行中であります。この編集委員の1人として、多くの原稿を読んできましたが、「日本の地誌」というタイトルで、地誌を書いて下さいと依頼しても、地域の地図もないような原稿もあり、地誌の意識が少ないという印象を受けました。地域の体系的・説明的記述の意義を忘れてはならないと思います。

例として挙げました、これらの分野をはじめとする様々な分野における地理学の研究活動の活性化と発表の機会を、この地理空間学会が提供していきたいと思っています。

新しい地理空間学会の発展のために皆様のご協力をお願いして、私の挨拶とします。

地理空間学会会長
埼玉大学副学長 菅野峰明